

八四 興眠社 上荻野村（同右）

八五 草風社 中津村（同右）

八六 講学会 郡内の自由黨員を中心に相愛社の活動と平行して講学会の設立計画が進められていた。一八八三（明治十六）年一月十日、下荻野村法界寺において、学術研究会設立につき発起人会が開かれ、小宮保次郎・天野政立・難波惣平・井上篤太郎・川井房太郎・永野信太郎・三橋某・村上安太郎・橘川文治郎が参集した。同月十六日、会員四十名が細川瀏と客員十七名ほどを招いて講学会発会式を挙げ、十九日には役員を選出し時間割を決定した。役員の構成は、幹事小宮保次郎・難波惣平、幹事補助天野政立、常議員川井房太郎・神崎正蔵、霜島久円・黒田黙耳・沼田初五郎、常議補助井上篤太郎・村上安太郎である。

講学会の時間割は、午前七〜八時『通俗民権論』（福沢諭吉）、同八〜九時半『利学』（ミル・西周訳）、同九時半〜一〇時半「経済」（書名不詳）、さらに午後七〜八時『通俗国権論』（福沢諭吉）、同八〜九時半『立法論綱』（ベンサム・島田三郎訳）という内容で、一週間から十日間にわたる集中的な短期学習計画が組まれていた。細川瀏を講師とすることのような学習会は、翌八四年にも五回開催されたことが確認されている（大畑哲前掲書、資料編13近代・現代③二九、この史料に一八八二年と注記したが一八八三年と訂正する）。

八七 同楽会 一八八三年七月、厚木町に設立された結社で、自他の見聞拡張を活動の目的としていた（新井論文）。

八八 愛国会 一八八三年十月二十七日、依知村に設立され周辺七か村を区域とした。荻原英助を会主とし、学識の培養、立憲政体に備えての良民養成を目指した（新井論文）。

八九 相愛協会 一八八四（明治一七）年四月に「相愛協会申合規則」が定められている。その第一条によれば、同会は、

すでに活動を開始していた自由党を助成することを目的に設立されたもので、会員は愛甲郡内の「有志」、すなわち自由党員と支持者により組織されていた。同会には、監督二名の下に庶務・文事・武事・会計・制裁担当が各二名置かれていた。事務執行の経費は会員より徴集したが、自由党助成の費用はまた別に考えられていた。「明治十七年四月相愛協会申合規則」という文書の最後には、佐伯十三郎・加藤政福・森豊吉・沼田初五郎・井上篤太郎・難波惣平・橋川文次郎・村上安次郎・石塚初五郎・森甚太郎・大沢勝丸・岡本与八の名が記されている。なお、同会と相愛社の関係、愛甲郡自由党とのかわりについては、さらに第三節の愛甲郡自由党の項を参照されたい。(資料編13近代・現代(3)三一)。

九〇 愛甲婦女協会 発起人や日付を欠く「愛甲婦女協会創立趣意書」が残されているのみであるが、相愛協会などの資料とともに難波文書にあることから、一八八四(明治十七)年に結成されたものと思われる。同趣意書は、婦人が隷属的地位から「男子の朋友相談相手」へと男女平等に進むことを訴えている。そのためには、学問によって智徳を養い、さしあたり演説会・懇親会に積極的に参加することが近道であるとしているが、他方において、身を慎しみ、家事・育児を大切にすることもあわせて説いている(大畑哲「明治女性史に関する二つの新史料」『神奈川県史研究』二八号、資料編13近代・現代(3)二四)。

津久井郡

九一 定期法律研究会 一八八一(明治十四)年十一月ごろ、中野村の梶野敏三が中心となり設立した。梶野は自由党員、八四年から九一年にかけて県会議員を勤めた(色川論文)。

九二 吉野政談演説会 一八八二年九月二十日、吉野村に設立され、年四回政談演説会を開催した(新井論文)。

九三 経世社 中沢村に設立されたが、創立年月日や活動など不明である(色川論文)。

足柄下郡

九四 仁恵社 一八八〇（明治十三）年一月七日以前に、小田原町の吉野直興を社長として結成されていた。同年三月ごろ、愛国社員の働きかけがあり、吉野らは国会開設の請願にとりくんだと報じられているが、詳細は不明である（『東京横浜毎日新聞』明治十三年三月十七日付）。

九五 足柄倶楽部 渡辺欽城『三多摩政戦史料』に、一八八一（明治十四）年十一月以降、中村舜治・武尾喜間太らにより創立されたとある以外は不明である。中村舜治は、小田原町で民権論を唱えた『足柄新聞』の社長で足柄上郡長に任じられた中村舜次郎のことかと思われる。

九六 忠友社 一八八二年一月ごろ、足柄・大住・愛甲郡の有志約六十名によって設立され、毎月二回小田原町で「学術討論演説会」を開くことを決めている（『東京横浜毎日新聞』明治十五年一月二十九日付）。

在東京の結社

九七 神奈川県懇親会 石坂昌孝・板谷良作・荻生田信敏・小笠原鐘・佐藤貞幹を世話人とし、一八八〇（明治十三）年十一月二十八日、第一回を東京の枕橋八百松楼で開いた。参加者は六十余名であった。第二回は八一年十二月で三十余名、第三回は八二年五月で二十九名、第四回は八二年十一月五日八百松楼で二十一名と減少している。国会開設運動が全国的に高揚している時期に開かれた第一回懇親会は参加者に大きな刺激を与えたようで、この直後に前述した武蔵六郡懇親会が開催された（小林孝雄『神奈川の夜明け』）。

九八 東京生糸商会 村野常右衛門が日高次郎・石坂昌孝とともに、二、三の商人の賛助を得て、一八八〇年七月ごろ設立し、事務所を東京本石町に置いた。この企図は、村野の言によれば、外国商人の貿易支配に対抗し、輸出の花形である生糸を直輸出することによって商権回復運動を行おうとするものであった。商会の活動は途中で取り止めになったが、産業結社の一

形態を示すものといえよう（村野廉一・色川大吉『村野常右衛門伝―民権家時代』）。

九九 静修館 一八八三（明治十六）年十一月二十三日、神田錦町に開設された。佐藤貞幹を館主とし東京に在学する神奈川県人の寄宿舎であったが、佐藤をはじめ石坂昌孝・中村克昌・深沢権八・内山安兵衛・細野喜代四郎・村野常右衛門・林副重ら在京メンバーが活動する拠点でもあった（新井論文）。

一〇〇 同志会 山口俊太らにより、一八八四（明治十七）年一月、谷中に設立された（新井論文）。

一〇一 神奈川県人談夢会 一八八四年六月、本郷龍岡町に設立された。石坂昌孝・若林美之助ら東京在住の神奈川県人の会合であった（新井論文）。

一〇二 読書会 在京の神奈川県人によってつくられ、一八八四（明治十七）年十月十八日に発会した。「読書会規則」には、「本会ハ専ラ政治法律経済哲学等ニ関スル諸書ヲ講読シ以テ各科ノ学理ヲ討究スルモノトス」という目的が掲げられている。会員は、石坂公歴（昌孝の長男）・若林美之助ら二十名である。会員は、各自好むところの学会に加入するか学会誌を購入してその内容を報告することとされており、講読書は四十七冊予定されている。残された記録によれば、同年一月十七日まで九回開かれており、若き日の北村透谷も会員として一度顔を見せている（色川大吉「明治十七年読書会雑記」『文学』二七卷六号）。

結社については、なお明治二十年代に入って結成された神奈川県通信所・神奈川県倶楽部・協立衛生義会・武陽倶楽部・小宮青年会・北多摩郡正義派などかなりの数を挙げることができる（色川論文、『町田市史料集』第八集、とくに新井論文参照）。しかし、明治二十年代に入ると政治や経済の情勢は変わってきており、この時期に入って組織された結社については、前記結社との同質性とともに差異性も考える必要があるので、結社が独自性を発揮した明治十年代で筆を止めておきたい。

二 結社の総括

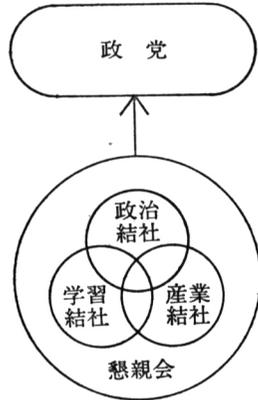
これまで郡別・成立年代順に整理してきた結社について、つぎに内容にたち入り簡潔に総括してみよう。

まず第一は、さまざまな結社の分類である。すでに色川大吉「明治前期の民権結社と学習運動」(『東京経済大学人文自然科学論集』二二号)で分類の試みがあるが、ここでは、これまで調べてきた県内諸結社をもとに、全国的な結社との関連も考えて、政治結社・学習結社・産業結社という分類をしておく。

政治結社とは、政治運動を主な目的とする結社であり、天賦人権論をふまえ、目指す国家構想をイギリス流の立憲制にもとめる場合が多かった。顕猶社・融貫社などをこの代表例に挙げることができる。政治結社(政社)が政党結成の基盤になったことはいうまでもない。政社の活動なくして自由党、立憲改進黨の成立はありえなかったのである。

学習結社とは、社員(会員)が学習や討論によって諸分野の認識を深めることを目的とする結社で、地域に根ざして自主的な教育活動を展開した教育機関も含めることができる。学芸講談会・融貫社講学会・相愛社による講学会・養英館・各地の学術や教育関係の結社などがこれに入り、三種類の結社のうちもっとも数が多いといえよう。

産業結社とは、農業生産の改良や産業問題を主要な課題とする結社であり、明治十年代の農民的「企業」の多くもここに加えることができよう。東京生糸商会・愛林社など事例はまだ少ないが、一八七二(明治五)年、養豚により学校経営費をまかなった得郷学校養豚所(現在 調布市)のような先例もあり(田中紀子「中村重右衛門伝」『多摩文化』九号)、今後の事例発掘が期待される。



しかし、諸結社は実際の場合、三種類の性格のうちいずれかに重点を置きながら、それぞれ二種類ないし三種類の性格をあわせ持つ場合が多かった。八王子第十五囀鳴社は、学習結社と産業結社の性格を、湘南社は学習結社と政治結社の性格をあわせ持っていた。また、弾圧を配慮して、政治結社の性格をかくし学習結社の形をとる場合も多かったようである。なお、すでに述べたように、各種懇親会が結社の組織化に大きな役割を果たしていることも注意しておく必要がある。以上のことから、結社については、上のように図示してみることができよう。結社の規模については、一村

ないし数村にわたる小結社と、融貫社・湘南社・相愛社のように一郡ないし数郡にわたり、各小結社の指導的人物を結集した大結社がある。このような大結社は、すでに政党化への前段階にあるものと考えられる。結社の活動については、都下の民権派ジャーナリストとの関係が深いが、この点については、渡辺葵「自由民権運動における都市知識人の役割」『歴史評論』一六五・一六六・一六八・一七〇(一七二号)に詳細である。

第二は、結社の歴史的意義であるが、その核心は結社の思想の誕生にあると考えられる。すなわち、自主対等な組織原理に基づいて社を結成し、自主的な諸活動を展開することにより、自己の成長、地域の発展、ひいては日本の在り方を模索しようとする精神の誕生である。

これは明治維新後の新しい動向であり、現代へとつながっている。もっとも、このような結社誕生の歴史的前提は近世以来の私塾などであり、さらに維新後の明六社や囀鳴社などの新しい活動形態が手本になったものと思われる。明治三、四年(一八七〇、七一年)ごろ、現在調布市に、相良某を教師とし、原泰輔・中溝昌弘がリーダーとなり、白鳥昌順・鈴木久弥・比留間

定右衛門らが参加して洋学研究会が持たれていた（田中紀子前掲論文）。この会の活動は、教師を中心とする私塾と会員を中心とする結社の中間形態を示すものとして興味深い。

第三は、結社の存在が県内の自由党・立憲改進黨の結成にあたり、不可欠の前提になっていたことである。もっとも、この点については、つぎに節を改めて述べることにする。

第三節 自由党と立憲改進黨

一 自由党の結成

本県の自由党員数は、後掲のように二百八十八名、一位の秋田県、二位の栃木県について全国第三位に位置している。また、自由党解党の直前に落成した文武研究所の有一館に入館できる人数を見ると、本県は東京と同数の六人で、高知県の八人、新潟の七人について第三位を占めている。

入館者数は、自由党への寄付金千円について一人の館生を出せる割合であったから、本県自由党の活動力がいぜんとして強固であったことを示している（『自由党史』）。この二例からわかるように、全国的に見て本県は、自由党の拠点県の一つだったのである。

県内でも、自由党総理板垣退助が自由党のとりでと評価した三多摩地域の比重は大きく、多摩三郡の党員数百六十二名は、県下党員数の六割弱にあたる。とりわけ南多摩郡自由党は県下の三割強の党員を集め、最強を誇っていた。南多摩郡について

党員数の多いのが、横浜区の四十二名であるが、その活動状況はまだ良くわかっていない。

これにくらべると、後で見るとように立憲改進黨員は、横浜を中心に十六名で、驚くほど少ない。一八八四（明治十七）年の党員名簿によれば、この数は全国第十九位にあたる。ちなみに関東の諸県をあげてみると、東京府九十六名、千葉県三十六名、埼玉県百五十四名（全国第二位）、群馬県十五名、茨城県八十七名、栃木県百四十八名（全国第三位）である。立憲改進黨創立に参加する嚶鳴社の県下における活発な活動、改進黨系になる横浜の有名な顯猶社の存在などを考えると、十六名という党員数は意外であるが、その理由はまだ十分に解明されていない。

自由党準備 会への参加

これまで神奈川県自由民権運動が全国組織の運動と交流するのは、『自由党史』により、自由党結成大会への参加が最初であるとされてきた。しかし、最近の調査によれば、交流の時期は自由党準備会結成時までさかのぼることがわかってきた。

一八八〇（明治十三年）十二月十日、北多摩郡蔵敷村の内野左衛門は、愛国社の有志と会していた。翌十二日の愛国社員有志による築地寿美屋会議には、内野とともに吉野泰三（北多摩郡野崎村）の名もあるから、はじめから二人は一緒だったのであろう。二人とも県会議員、少し前の十二月五日に開かれた武蔵六郡懇親会にそろって出席していた。すでに内野は、地方官会議を二回、元老院議事を一回傍聴しているし、一八八〇年七月十日には井生村楼いせいむらの演説会を聞いているから、全国的動向に深い関心を持って行動していたことがわかる。内野・吉野が参加した愛国社有志の会合については、少し説明が必要である。

国会開設運動が発展する過程で、政党結成という新しい組織論が出されたのは一八八〇年十一月の国会期成同盟第二回大会であった。その背景には、同年四月に出された集会条例の第八条「政治に関する事項を講談論議する為め其趣旨を広告し、又



吉野泰三



内野全左衛門

は委員若くは文書を発して公衆を誘導し、又は他の社と連結し及び通信往復することを得ず」により、弾圧が強化されるといふ事態があった。政党の結成は、河野広中・郡利・松沢求策・山際七司らによって提案された。しかし、これらの提案は大会で否決されたので、政党結成論者は大会の外で活動をはじめた。

一八八〇年十一月の段階で、政党結成の運動を推進している二つのグループがあった。一つは河野広中・植木枝盛ら愛国社系政社に属する積極的な政党結成論者である。大会中の十一月二十六日、愛国社関係者の会合で杉田定一・河野広中が「自由主義一大政党」の組織を主張したところ、参会者はほぼ似たような見解であった。『植木枝盛日記』によれば彼らは十二月一

日、六日と自由党結成の討議を重ねている。もう一つは、山際七司(新潟)・佐野広乃(山梨)・松田正久(長崎)・林正明(東京・共同社)らであり、在地民権結社および都市民権派の潮流に属する人びとである。山際のグループは、自由党組織趣意書・自由党結成総則・自由党申合規則からなる活版の『自由党規則』を作成し、新聞発行の資本金分担保まで話を進めていた。

十二月七日、山際は愛国社の河野に面会して合同を申し入れた。こうして両派は合同して政党を結成することを十二日に決定し、十五日には沼間守一ら嚶鳴社員も加わり盟約・規則を議決した。ここに成立した「自由党」は、まだ組織も整わず翌年には国会期成同盟とともに自由党へ発展的に解消するから、「自由党準備会」とした方が実状にふさわしいのである(江村栄一「自由党の結成と政体構想」『史潮』八九号)。

草間時福の紹介であろうか、内野と吉野が愛国社を訪れたのは、このように両派合同

の直前であった。その十二月十日、河野らは「自由改進黨盟約」八か条を草し、さらにこれを五六条に仕上げた。この案文は、翌十一日、築地寿美屋の会議で再確認された。内野・吉野を含む十二名の出席者の中に、草間時福・吉田次郎・野村元之助と三人の嚶鳴社員の名が見えるのは注目すべき事実である。立党の事を決した十二日、愛国社関係者は「秘密会」を開き、内野も含め二十五名が調印をしている。彼らの団結を誓ったものと思われる。この氏名一覧には、先の嚶鳴社員と吉野の名は見えない。これらのことを記した内野の手帳に、続いてつぎのような草案が書かれている。

第一 我党(わがとう)ノ主義ハ人民自治ノ精神ヲ養成シ漸（つ）ヲ以テ自主ノ権利ヲ拡張セシメントス

第二条 前条ノ主義ヲ拡張セン為メニ毎月一回会日ヲ定メ演説又ハ討論ノ会ヲ開ク可シ(以下無し)

この案文は、ごくわずかな字句の異同があるが、上述した北多摩郡の自治改進黨総則の第一条、第二条に符合する。このことは、のちに北多摩郡自由党に発展する自治改進黨結成の契機が、武蔵六郡懇親会を背景にしながらも、直接には自由党準備会の結成過程のなかで育くまれたことを物語っている(内野奎左衛門「明治十三・十四年手帳」・同「覚書」、内野悌二氏蔵。資料編13近代・現代(3)一九)。

自由党結成 一八八一(明治十四)年十月二日、国会期成同盟第三回大会は、自由党の結成を決議し、大会を自由党結成大会にきりかえた。この前後の動きについては省略し、大会の推移だけをごくかんたんに示すとつぎのようになる。

△一日▽自由党結成大会にきりかえ、自由党組織案起草委員五名を選挙。△六〇十一月一日▽起草委員原案作成に従事。△十二〇十六日▽毎日自由党組織相談会を開催。△十七日▽自由党親睦会。△十八〇二十七日▽議事に入り、三次会を経て盟約・規則を決定。△二十八・二十九日▽役員選挙。自由党結成大会はここで事実上終了したが、三十日から数度の懇談会を開き、十万円の募金によって自由党の機関紙を発行することを決め、十一月四日に閉会した(江村前掲論文)。

第2章 自由民権運動

第17表 1881年10月自由党結成会議参加者（神奈川県）

参 加 者	I	II	III	IV	V	VI
	1 日	5 日頃	18~20日	24日頃	26日頃	「自由党会員名簿」
伊 達 時 郎			出	出	出	有
水 島 保 太 郎			出	出	出	有
成 内 頼 一 郎			出	出	出	有
佐 藤 貞 幹			出	出	出	有
中 村 克 昌				出	出	有
指 田 茂 十 郎			出			
田 村 半 十 郎			出			
永 嶋 庄 兵 衛			出			
中 川 良 知			出			
山 本 作 左 衛 門			出			

典拠：I…「国会期成同盟本部報・ハノ123報」、II…『東京横浜毎日新聞』明治14年10月7日、III…植木枝盛「東京通信」（『高知新聞』明治14年11月2日）、IV…岩波文庫本『自由党史』中・81~84ページ、V…関戸覚蔵『東陞民権史』、VI…『朝野新聞』明治14年11月6日および「明治14年10月自由党会員名簿」。IVとVの期日は、『河野磐州伝』上などにより推定した。

さて、神奈川県参加者は、資料上、十八日から出席していることがわかる。十名の出席状況をまとめてみると第十七表のようになる。

伊達・水島・中川は湘南社、佐藤・山本は融貫社、中村は自治改進党と融貫社、成内は八王子第十五囀鳴社の指導的人物であり、指田と永嶋も結社の活動歴をもつ県会議員である。中川と山本が国会開設の建白書提出に尽力したことについてはすでに前述した。この参加者たちの資格はわからないが、県下の自由党の成立にあたり、自治進党・湘南社・融貫社のような一郡ないし数郡にわたる大結社が初めから関係を持ったことがわかる。県下の大結社にはもう一つ相愛社があるが、この相愛社も間もなく社をあげて自由党に参加してくる。結社の基盤があつてこそ、神奈川県下の自由党は誕生できたのである。この点を自由党本部との関係でもう少し立ち入ってみよう。

地方部の設置

明治十五年一月十九日付の自由党本部発「第六報」には、各地に地方部（自由党支部）の設立を促すと

もに、幹事大石正巳・柏田盛文が招待されて一月九日から出張し、神奈川県南多摩郡に地方部が設立されたことを報じている。『朝野新聞』（明治十五年一月十五日付）によれば、十日、二人を迎えた懇親会の有志